他教育機関と共催の『まるごと』講座
-課外活動を中心に-

田中　博子
ロンドン日本文化センター

１．実践の背景

国際交流基金ロンドン日本文化センター（以下、ロンドンセンター）では、ロンドン大学 The School of Oriental and African Studies（以下、SOAS）のランゲージ・センターと共催で『まるごと　日本のことばと文化』（以下、『まるごと』）を使った講座を開講している。2013 年１月～６月まで『まるごと』講座パイロットコース（試験的講座）として、ロンドンセンターアドバイザー（国際交流基金が派遣している日本語教育専門家および報告者）が授業を行い、2013 年 10 月より、SOAS ランゲージ・センター講師に引継ぎ、『まるごと』講座本コースを担当してもらっている。

国際交流基金の他拠点と異なり、ロンドンセンター独自で講座を開講せず、共催でコースを行う理由には、ロンドンセンターの建物内に常時使える教室がないこと、および、地理的条件上難しい（多くの大学が周辺にある文教地区にあり、他教育機関との競合を避けるため）といった事情が背景にある。

２．実践内容

2.1　コースの概要

本レポートで報告するコースの基本情報は、次の通りである。

レベル	A1
実施コース名	JF & SOAS Language and Culture Course
実施日時または期間	2013 年 1 月～6 月（パイロットコース：２学期分） 2013 年 10 月～12 月（１学期）、 2014 年 1 月～3 月（２学期）
授業時間	120 分@１コマ、１回×10 週（@学期）＝10 回
授業担当講師	SOAS ランゲージ・センター講師
1 クラスの学習者数	定員 12 人～15 人まで（教室による） パイロットコース 11 人、 本コース火曜クラス 15 人→９人、木曜クラス 13 人→６人
使用教材	『まるごと　入門』「かつどう」編 『新日本語の基礎　かな練習帳英語版』 『Hiragana/Katakana in 48 Minutes』 『かな入門』

１クラスの生徒数は 12～15 人、１回２時間（19：00～21：00）の授業、10 回授業を１、２学期で行い、教科書が一冊終わるサイクルで行った（SOAS ランゲージ・センターは３学期制だが、３学期の講座は開催せず [(1)]）。『まるごと　入門』「かつどう」編のみのクラスで「りかい」編のクラスは設けておらず、火曜日・木曜日の２クラスを並行開講し、両日とも「かつどう」編のみのクラスで開講した（詳細な講座チラシは資料１を参照）。「りかい」編クラスを設けず、「かつどう」編のみのクラスにした理由は、両

クラスを受講しても受講料の割引がないシステムになっており、「かつどう」編一つだけの受講料だけでも高額のため、学習者の負担を考慮し、「かつどう」編のみのクラスを設けることになった。

対象学習者は成人社会人で、参加者の学習動機は「もうすぐ日本に行くから」「ビジネスで日本に頻繁に行くから」「以前から日本文化と日本に興味があったから」「同僚や友人に日本人がいるから」といったことが挙げられた。

2.2　授業の進め方

最初にオリエンテーションを設け、どういうコースか、『まるごと』での学習方法、『まるごと』がどういうコースブックか、「まるごとプラス」の使い方を説明し、その後の授業では、基本的に『まるごと』の「かつどう」編を課の順に指導していった。１授業 120 分のうち、90 分を１課分指導にあて、残りの 30 分を文字指導にあてた。これは、継続希望の学習者が既存の他コースに移行したい場合、文字習得が必須になるからという配慮である。

指導形式としては、インプットを重視した。自然な日本語で収録されている音声を数回聞かせ、そこから、キーワードとなる語彙や表現を拾ってもらい、文法的規則を見つけてもらうという「帰納法」で指導した。

パイロットコース時には、課していなかったポートフォリオも本コースでは導入した。学習者はオリエンテーションで「何をファイルするのか、どういう目的でファイルするのか」を講師から説明を受けた（ポートフォリオは資料２、３を参照）。

評価に関しては、振り返りのテスト、ポートフォリオの評価を今回は実施せず、最後に学習者によるアンケートのみを実施した（アンケート結果は資料４、５を参照）。

2.3　授業内容

2013 年 1 月より実施したパイロットコース、および 2013 年 10 月から実施した本コースでは、担当講師は異なるものの、指導内容および活動に関しては同様のため、両コースを混ぜての授業実践を説明する。

表１：１学期 2013 年 10 月～12 月（10 回授業）の授業内容

	『まるごと』コースブック（90 分）	文字指導（30 分）
第 1 回目	オリエンテーション トピック「1. にほんご」第 1 課「こんにちは」	ひらがな（あ～さ行）
第 2 回目	トピック「1. にほんご」第 2 課「もういちどおねがいします」	ひらがな（た～は行）
第 3 回目	トピック「2. わたし」第 3 課「どうぞよろしく」	ひらがな（ま行～ん）
第 4 回目	トピック「2. わたし」第 4 課「かぞくは 3 にんです」	ひらがな（濁音）
第 5 回目	トピック「3. たべもの」第 5 課「なにがすきですか」	促音、長音、拗音
第 6 回目	トピック「3. たべもの」第 6 課「どこでたべますか」	カタカナ（ア～サ行）
第 7 回目	**課外活動**	
第 8 回目	トピック「4. いえ」第 7 課「へやが 3 つあります」	カタカナ（タ～ハ行）
第 9 回目	トピック「5. せいかつ」[2] 第 9 課「なんじにおきますか」	カタカナ（マ行～ン）
第 10 回目	トピック「5. せいかつ」第 10 課「いつがいいですか」	濁音、促音、長音、拗音

表２：２学期 2014 年 1 月～3 月（10 回授業）の授業内容

	『まるごと』コースブック（90 分）	文字指導（30 分）
第 1 回目	トピック「6. やすみのひ」第 11 課「しゅみはなんですか」	その課に該当する単語の読み書き
第 2 回目	トピック「6. やすみのひ」第 12 課「いっしょにいきませんか」	同上
第 3 回目	トピック「7. まち」第 13 課「どうやっていきますか」	同上
第 4 回目	トピック「7. まち」第 14 課「ゆうめいなおてらです」	同上
第 5 回目	トピック「8. かいもの」第 15 課「かわいい！」	同上
第 6 回目	トピック「8. かいもの」第 16 課「これ、ください」	同上
第 7 回目	**課外活動**	
第 8 回目	トピック「9. やすみのひ」第 17 課「たのしかったです」	同上
第 9 回目	トピック「9. やすみのひ」第 18 課「つぎはきょうとにいきたいです」	同上
第 10 回目	総復習ワークシート ポートフォリオについてグループで話す	

2.3.1　教室内外の文化活動の取り組み

ロンドンセンターでは『まるごと』講座を「ことばと文化」という視点から、教室でことばを学ぶだけではなく、リアルワールドの文化体験として課外活動を取り入れた。幸いなことに、ロンドンには、日本食・日本の小物などを売っている日本式スーパーやデパート、日本人シェフ、日本人スタッフで経営されている日本食レストランも多いため、授業で習得した言語能力と言語活動を実際の場面で試すという課題遂行を行った。以下、詳細について述べる。

(1)第１学期の課外活動

第７回目の授業時間を使い、近隣の日本食レストランで会食を行った。事前に、行く予定のレストランのメニューを入手し、第６回目の授業で、メニューを見て、材料や調理法がわかるようになるよう、以下の説明を与えた。

例えば、メニュー上に「チキン・テリヤキ」とあった場合、「チキン」が食材、「テリ」が味付け、「ヤキ」が調理法などの構成になっていること [(3)] を説明した。さらに、「揚げ」「フライ」「カツ」などの調理法、また、醤油や砂糖、みりんや酒など日本食によく使われる調味料なども説明した。食材については、第５課「なにがすきですか」で一通り学習しているため、魚や肉や野菜の個々の名前などは、既習である。課外活動の直前の授業（第６回目）で、学習者は「焼き鳥」「焼き魚」「鳥から揚げ」「エビフライ」「揚げなす」「揚げ豆腐」「チキンカツ」「とんかつ」などを実際のメニュー（レアリア、ローマ字表記）から読み、どういう料理か想像し、話し合った。

第７回目は、教室ではなく、レストランに現地集合し、それぞれ好きな料理を注文して会食を楽しんだ。なお、会計については、各自が自分の飲食代を払うシステムにし、会計の際に「自分が何を注文し、何を飲んだか」を述べなければ精算ができないようにした。これは、メニューの語彙の復習にも繋がった。コース終了後のアンケートによると、この会食がやはり一番人気の活動であり、欠席しがちな学生

もこの課外活動だけは忘れずに参加したほどである。

(2)第２学期の課外活動

第１学期と同様、第７回目に課外活動を行った。第５回目の授業（トピック「８．かいもの」第15課「かわいい！」）で土産物の語彙などを学習し、「買いたいものについて話す。どこで買えるか話したりする」というCan-do能力を習得し、第６回目の授業（第16課「これ、ください」）で買い物のし方を習得した。そこで、次の第７回目の授業時間を利用して、ロンドンにあるジャパン・センター（日本食材および雑貨や本を売っている大型スーパー）に行き、買い物をするという課外活動を行った。この課外活動の前の授業（第６回目）では、日本の「すする」文化についても説明した。英語圏の文化では、音を立てて飲食することはエチケット上、よくないこととされており、学習者の中には日本の場合「麺類は音を立てて食べてもよい」ことを知っている学習者もいたが、知らない学習者もいたため、念のため説明した。さらに、『エリンが挑戦！にほんご できます』のウェブ「第８課ざるそばを食べる」ゲーム紹介、および、「まるごとプラス」ウェブの「生活と文化」から「ラーメンの作り方と注文のし方」のビデオを見せ、本物のラーメンの作り方や食べ方を紹介し、クラスで日本の食文化について話し合った。

課外活動の買い物の後、この「すする」文化を体験するため、近くのラーメン店で会食をして解散という活動だったが、学習者は概ね楽しんでいたようである。麺をすすることができず、苦戦していた学習者もいたが、買い物中は、「高いです」「かわいい」「ガールフレンドにあげます」など、授業で習った表現を店で頻繁に使っていた。

(3)他の日本文化紹介の取り組み

パイロットコースでは、休憩時間にお茶と日本酒をふるまった（本コースでは設備の関係上、取り入れなかった）。英国では、日本茶は一般的にグリーン・ティーと思われているが、実際には日本茶には数種類あることを紹介するため、毎回、緑茶・ほうじ茶・玄米茶など種類を変えて教室に持って行き、お茶の各種類の名前も覚えてもらった。この取り組みでは、単に日本の飲み物を体験してもらうだけでなく、毎回係りを決め、係りになった学習者は、他クラスメートの注文を取り、教師のところに行き「(例)日本酒３つとほうじ茶８つ、お願いします」と言わなくてはならないタスクを課した。これは、日本文化に触れるだけでなく、飲み物の注文のし方、物の数え方もいっしょに習得してもらうことが狙いである。また、このような休憩時間を設けることで、クラスの雰囲気が打ち解けたものになり、学習者同士の仲間意識も強まり、飲酒することで恥ずかしがらず話せるようになった学習者もいた。つまり、この日本文化紹介の取り組みは、クラスの良い雰囲気作りの効果もあったと言えるだろう。

2.3.2　IT・SNS技術の使用

パイロットコースでは、U-Streamでの授業録画同時配信も試みた（本コースでは設備の関係上、取り入れなかった）。これは、何らかの理由で授業に来られなくても、自宅や職場で授業を受けられるようにすること、欠席した授業を後日見ることができること、また、復習として使ってもらうことを目的とし、録画した毎授業をU-Stream上に載せていた。実際に視聴した参加者はそれほど多くなかったが、毎回授

業に出席していても、自宅で復習として利用する熱心な学習者もいた。このような同時配信の遠隔授業は、現代のようなＩＴ社会では今後も需要があると思われる。

さらに、パイロットコースでは、紙媒体のポートフォリオの代わりに、Facebook を利用した。全学習者がFacebookのアカウントを持っているわけではないため､強制的に加入させることはしなかったが(１人を除き、全員加入)､「日本関連の活動をした、日本関連の展覧会に行った」など、Facebook 上に写真と共に書き込む学習者も多くいた。また、コース終了後も、このようなソーシャルネットワークで繋がっている学習者も多く、情報交換を通して、継続学習への支援に繋がっているのではないかと考える。

一方、本コースでは紙媒体でのポートフォリオを試行した。これは、今まで紙媒体のポートフォリオを導入したことがなかったため、試験的に実施してみるという目的で取り入れた。オリエンテーション時にポートフォリオの目的、ファイルする内容などは講師から学習者に説明したが、今回は試験的導入のため、評価に含めることはしなかった。学習者のうち、ポートフォリオに取り組んでいた学習者は２～３割程度だったが、最後の授業で、特に文化体験の部分を教師や他の学習者に見せながら説明することで、学習意欲の向上、自分で自分の学習を管理する自律学習を促したようである。さらに、ポートフォリオに取り組んでいなかった学習者は、取り組んだ学習者の話を聞くことで、競争意識も生まれ、次回はポートフォリオに真面目に取り組もうと感じた学習者も多かった。

2.3.3　文字指導

１回の授業で「かつどう」編を 90 分、文字指導を約 20～30 分行った。パイロットコースでは、パワーポイントとフラッシュカードを使用し、文字が読めるようになることを目標とし、絵が文字に変わる連想法での指導を試みた。市販教材の『Hiragana/Katakana in 48 Minutes』(Hiroko C Quakenbush & Mieko Ohso (1999)) を参考に、パワーポイントとフラッシュカードを作り、授業中は読めるようになることに焦点を置き、書く指導に関しては、国際交流基金出版の『かな入門』から該当部分のページをその都度配布し、宿題として書く練習をしてきてもらった。「日本語でコミュニケーションができるようになる」ことだけを目標としている学習者もいたため、宿題提出は強制にはしなかった。そのため、コース終了後には、文字習得の差が生じたが、学習者により目標も学習動機も異なるため、柔軟性のあるコースであることを重視し、文字習得をコースの目標にしなかった。

本コースでは、講師の希望により『新日本語の基礎　かな練習帳　英語版』(スリーエーネットワーク出版) を使用した。授業では、一つ一つの文字導入だけではなく、筆順や「止め・跳ね・払い」といった細部にも注意して指導し、書く練習を宿題とした。パイロットコースと同様、文字習得には差が出たものの、『まるごと』本来の目的の課題遂行に焦点を置き、「文字は 60%くらい読めればいい」ということを目標にした。

３．実践の成果

前述の「２．実践内容」で述べた活動は、共催校に既にある他のコースとの区別化に繋がっている。アンケートで書かれた学習者の感想に「課外活動が楽しく充実していた」「ことばだけでなく文化も学べてよかった」という意見からも分かるように、課外活動は有益なものだった。また、教室外でのリアル

ワールドでの課題遂行は、学習者の学習意欲と満足度を高めるだけではなく、一般の日本語講座と異なる『まるごと』講座ならではの活動であり、特徴づけることができたと言える。

3.1　学習者にとっての成果

『まるごと』コースブックは、学習者がCan-doごとの言語能力を習得し、課題遂行するという、学習者にとってもその課、その授業の目的や目標が分かりやすく設定されている。そのため、各授業の終わりにCan-doチェックを行うことは、各学習者にとっても自分の学習を振り返り、一つ一つの学習成果が感じられたようである。

また、学習者の中には、『まるごと』講座参加を通して、ロンドンセンターで行われている他の芸術・文化イベントなどにも参加し続けている学習者も多い。これは、個々の学習者の言語学習に対する意識が変わり、行動が変わってきたと言える。このように、学習スタイルが多様化され、学習者の学習過程に個人の意識や行動が適用され、個人のものになっていくことは、Ａ１からＢ１への自立した言語使用者になる上でも重要である。つまり、他の通常の言語クラスではできないことを、『まるごと』講座に取り入れることにより、既存のコースと区別化でき、学習者の意識や行動、学習過程に変化を生み出したという成果が表れている。

さらに、他の教育機関ではあまり取り入れられていないポートフォリオも学習者に今回は試験的に課した。全ての学習者が取り組んだわけではないが、学習者Ａは毎週文化体験記録をつけ（資料２参照）、その体験を通して関連した日本語の語彙の意味を調べるという教室外での自主学習も行い、自立した学習者への動機に繋がった。さらに、別の学習者Ｂは、トピック「3. たべもの」で食べ物に関する語彙を学んだことにより、日本食への興味を広げ、わざわざ納豆を買って食し、その感想を文化体験記録に残した（資料３参照）。このように、ポートフォリオを通して、日本語を学ぶだけでなく、日本文化を積極的に学ぼうとする姿勢がみられた。

3.2　教師側・講座企画側の成果

教師側の成果としては、共催校の『まるごと』講座担当講師の「JF 日本語教育スタンダード」（以下、「JF スタンダード」）の理解が深まり、新コースブック『まるごと』の使い方に慣れ、新しい教え方が習得できたと感じたことが分かった。また、共催で運営することで、他教育機関にも「JF スタンダード」や『まるごと』の理念を伝えることができた。講座企画側（ロンドンセンター）としては、国際交流基金の言語の分野のみならず、文化芸術交流、日本研究・知的交流の分野まで広く興味を持ってもらうことを狙いとした。日本語を勉強することだけではなく、異文化を理解し、現在の生活を変えるための言語生活とは何か、英国で実現可能な言語行動とは何か、英国にいながら日本文化をどう日常生活に取り入れてもらえるか、などを視野に入れ、コースデザインを行った。そして、『まるごと』コースブックを使うことで、これらの目的は果たせたと言えるだろう。

また、ポートフォリオの代わりに使った、SNS（Facebook）での情報交換は、主に学習者に読む媒体として利用してもらうのが目的だったが、この目的とは別に、教師と学習者の繋がりを生むだけでなく、学習者同士のネットワークを生み出す効果もみられた。学習者が日常生活で目にした日本語、そしてそ

の意味を書き込んだり、自分で調理した日本食の写真を掲載したり、コース終了後も交流が続いている。また、教師側も学習者が何に興味があるのか把握でき、今後のクラス活動計画に役立てられるという成果がある。

一方、パイロットコースで実施したU-Streamは残念ながら、あまり成果がなかった。当初は、欠席した参加者のために設定し、何らかの理由で授業に来られなくても授業について行けるようにするというのが目的だったが、実際に視聴する学習者は、欠席した学習者ではなく熱心な学習者だったという逆の成果になってしまった。そのため、本コースでは実施しなかった。

４．今後の課題

ロンドンセンターの『まるごと』講座は、ロンドンならではの特色を活かし、外国にいながら日本文化に触れられるよう、「日本食レストランで会食」「日本食・日本製品大型スーパーで買い物」という課外活動に重点をおいた。しかしながら、次のＡ２コースが開講された場合、どのような別の課外活動を盛り込むかという点が今後の課題になる。継続学習者にも新しい情報、新しい経験の機会が与えられるような別の課外活動を考えていかなければならない。

運営面の観点から述べると、国際交流基金の他拠点ではあまり例を見ない、他教育機関（SOAS ランゲージ・センター）との共催講座ゆえに、企画実行上、困難なことは多々ある。しかし、別の視点で言えば、JF スタンダード準拠の『まるごと』をいち早く国際交流基金直営の講座ではなく、他教育機関で使ってもらうという利点はあり、『まるごと』を普及する効果もあった。

コース終了後の学習者の評判は概ね良く、次のＡ２のコース参加を希望する学習者も多かったが、現時点ではＡ２クラスは開講していない。継続学習を希望する学習者は、SOAS ランゲージ・センターの既存の他コースへ入ってもらうことも可能だが、既存の他コースでは使用教科書も学習スタイルも異なるため、他コースへ移行する学習者はいなかった。将来的にはその先のＡ２コースを開講することも視野に入れているが、いつどのように実現するかは今後の課題である。

また、アンケート結果（資料４、５参照）にも見られるように、新たな文化活動をどうコースに盛り込むか、また、「りかい」編を並行して開講できるか、次コースの『まるごと　初級１』クラスを翌年度は開講できるかなど、課題は山積みである。さらに、共催であるため、コース受講料もロンドンセンター側では決められない。授業回数、授業時間、開催時期、授業料などもSOASランゲージ・センターの他コースと横並びでなければならない（『まるごと』講座は教科書込み表示のため、受講料は一番高い）。事実、ロンドンセンターには「日本語を習いたいが、コースを開いていないか」などの問い合わせは多々ある。その際に、共催の『まるごと』講座を勧めるが、ロンドンの物価を鑑みても高い受講料ゆえに、ほとんどの学習者が諦めてしまうか、他の語学学校に流れてしまっている。ウェブやメールマガジン上で宣伝するだけでなく、『まるごと』講座のチラシ（資料１参照）も様々な場所やイベント会場に置き、広報を行っているが、受講料を知ると途端、多くの学習者が申し込みを断念するという現状がある。これでは、日本語学習者数の拡大に繋がらない。このような厳しい条件のもとで、どのように参加者を増やしていくかも課題である。

さらに、ロンドンセンターでは、『まるごと』講座に従事できる専任アドバイザー（国際交流基金派遣

の日本語教育専門家）や常勤・非常勤講師がいないため、現状では『まるごと』講座を外部に依頼するしかない。『まるごと』講座の担当講師の人事権は、共催校の SOAS ランゲージ・センターにあり、ロンドンセンターで決められるものではなく、今年度（2014 年度）の『まるごと』講座担当講師も誰になるか直前にならないと分からない。つまり、担当講師が変わる度に、『まるごと』で教えるための教師研修が必要になってくる。その外部講師（共催校の講師）に対して、『まるごと』の理念をどう伝えていくべきか、『まるごと』的な教授法をどのように学んでもらうかも今後の課題である。この課題の第一の取り組みとして、ロンドンセンターでは、教師向けの研修『まるごと』セミナーを過去３回開催した（2012 年、2013 年、2014 年開催）。そして、今後もこのような教師研修を続けていく予定である。

［注］

１．共催契約上、『まるごと　入門』を１、２学期で終わらせたため。

２．トピック「5. せいかつ」第８課「いいへやですね」はスケジュールの関係上割愛

３．この説明は、2012 年英国日本語教育学会で発表された『ロンドン日本食レストランメニューの分析報告』（福島 2012）に基づく。

資料１：2014 年 10 月開始の本コースのチラシ

BEGINNER'S JAPANESE COURSE from the Japan Foundation and the School of Oriental and African Studies (SOAS), University of London

JAPANFOUNDATION

SOAS University of London

The Japan Foundation & SOAS **Language and Culture Course**

> Beginner Level

こんにちは！ konnichiwa!

(Hello!)

いっしょに いきませんか。 isshoni ikimasen ka?

(Shall we go together?)

もういちど おねがいします moo ichido onegaishimasu

(Could you repeat that, please?)

Learn practical Japanese skills for real-life communication!

Tuesdays/Thursdays, 19:00 - 21:00

Term 1 8 October 2013 – 12 Dec 2013 **Term 2** 14 January - 20 March 2014

Course Tutor: Mr Shinichiro Okajima, SOAS Language Centre **Venue:** School of Oriental and African Studies (SOAS)
Course Fee: £310 per term, including course textbook and materials

The Japan Foundation & SOAS Language and Culture Course (Beginner Level) is a new kind of course for absolute beginners (JF Standard for Japanese Language Education A1 Breakthrough) of Japanese. It is based on the JF Standard for Japanese Language Education, rather than traditional methods of language education that focus on grammar and sentence structure. The aim of the course will be to use Japanese language skills to get to know people, visit restaurants and take part in many other Japan-related events. **At the end of every lesson, participants will be able to perform specific, practical tasks in Japanese.**

The course will not focus on language alone; learning Japanese culture will also be an important element in the lessons. The course will incorporate **videos, games and media** that will help you to learn about Japan, in addition to **social networking services** such as Facebook to give you the opportunity to use your new Japanese skills outside of the classroom. You will also have access to the supplementary **MARUGOTO+ Japanese Learning website**. Participants of this course will even be eligible for **temporary full membership of the Japan Foundation London Library** for the duration of the term they are enrolled in and will be able to borrow resources from its collection of approx. 10,000 Japanese language education textbooks and other learning materials.

This course is perfect for absolute beginners of Japanese who would like to use their new language skills in practical situations, and to really connect with Japanese society.

"I liked the pace of the course, and was surprised we learned hiragana and katakana [Japanese writing] *so quickly. As it was an introductory course, I felt the balance was right for people who were complete beginners, and self-studying students like myself who had a little bit of language under my belt already. I certainly feel after learning about ordering food that I would be able to do this in Japan."* **- JP Rutter, former course participant**

> Book your place online at www.soas.ac.uk/languagecentre

資料２：本コース参加者生徒Ａのポートフォリオ（文化体験記録）

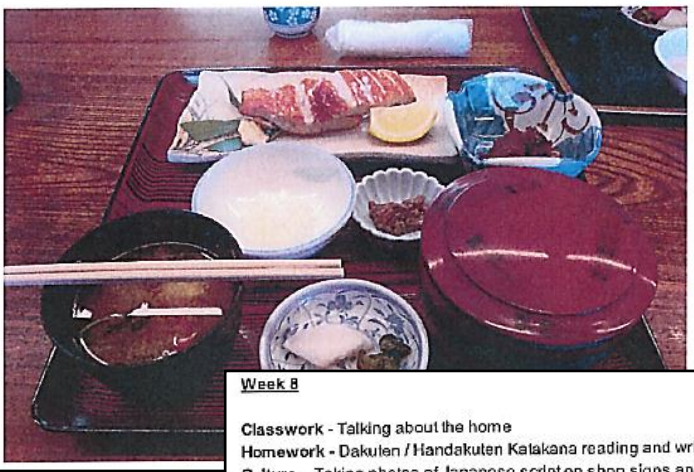
Week 7

Classwork - No lesson

Homework - No lesson

Culture - Class meal at Asakusa in Camden.

I had edamame, yakizakana teisholu (grilled fish set meal with rice, miso soup and pickles), and fried fish cake. To drink I had "biru futatsu" (two beers).



Week 8

Classwork - Talking about the home
Homework - Dakuten / Handakuten Katakana reading and writing
Culture - Taking photos of Japanese script on shop signs and decoding them

Japanese	Romaji	English
日本のキッチン	Nihon no kicchin	Japanese Kitchen
おおきい	Ookii	Big
わさび	Wasabi	Wasabi (Japanese horseradish)
はし	Hashi	Chopsticks
きらく	Kiraku	Carefree

資料３：本コース参加者生徒Ｂのポートフォリオ（文化体験記録）

2013-11-23

BOUGHT FROM THE JAPAN CENTRE

INTERESTING!

> Click for larger image
£3.99
Like 2

1

Description

This item is originally frozen and become chilled during delivery. Please follow the manufaturer's instructions or our recommended Use By Date. Keep in fridge and do not refreeze.
This item will be sent with cool gel in a poly box BEFORE 12 NOON NEXT DAY DELIVERY. UK mainland only

A uniquely Japanese traditional food made from fermented certified organic soy beans, commonly eaten at breakfast time or lunch. Each of the three packets comes with a sachet of natto sauce and also optional mustard if you like a kick! Try it if you dare! 45g x 3 packs.

Background

Natto could definitely be described as an acquired taste and is often either loved or hated. It has a pungent smell and strong flavour. Natto is said to have many health benefits thanks to its high protein and vitamin content. It contains pyrazine which is great for the blood, preventing blood clots, heart attacks and even strokes. Studies has also proven that Natto is good for the skin, bones and has anti-cancer properties.

資料４：アンケート集計結果（パイロットコース）

※2013 年 1 月～2014 年 6 月（最終授業出席者 7 名分の集計）

1. コース全体はどうでしたか。（内容、講師、活動のバランス、など）

とてもよかった（7 名）	よかった（0 名）	あまりよくなかった（0 名）	よくなかった（0 名）

2. アドミ（申込時の対応、コース運営など）についてどうでしたか。

とてもよかった（7 名）	よかった（0 名）	あまりよくなかった（0 名）	よくなかった（0 名）

3. 教室、場所についてどうでしたか。

とてもよかった（5 名）	よかった（2 名）	あまりよくなかった（0 名）	よくなかった（0 名）

4. もし平日午後（例：4 時、または 5 時～）の授業があったら、参加できますか。

はい（2 名）	わからない（2 名）	いいえ（2 名）	未記入（1 名）

5. コースを通してＡ１レベルの Can-do に達したと思いますか。

十分に達した（2 名）	ある程度達した（4 名）	あまり達しなかった（1 名）	全然達しなかった（0 名）

6. コースについて改善すべき点はありますか。

「例えば映画を観るなどの文化的活動がもう少し欲しかった」「３学期に文法クラスを開いてほしい」「特になし、すべて良かった」「宿題を増やしてほしい」「復習クラスがあるといい」「コースを続けたいのでＡ２コースを開いてほしい」「課外活動が楽しく充実していた」「ことばだけでなく文化も学べてよかった」

7. 他にコメントはありますか。

「次のコースを開いてほしい」（複数）

8. このコースのことをどこで知りましたか。

Japan Foundation からのメール（2 名）、ウェブサイト（2 名）、Facebook や Twitter（0 名）	
コース案内のチラシ（0 名）	SOAS のウェブサイトで（2 名）

資料５：アンケート集計結果（本コース）

※2013 年 10 月～2014 年 3 月（最終授業出席者：火・木曜クラス合計 10 名分の集計）

1. コース全体はどうでしたか。（内容、講師、活動のバランス、など）

とてもよかった（9 名）	よかった（1 名）	あまりよくなかった（0 名）	よくなかった（0 名）

2. アドミ（申込時の対応、コース運営など）についてどうでしたか。

とてもよかった（6 名）	よかった（3 名）	あまりよくなかった（1 名）	よくなかった（0 名）

3. 教室、場所についてどうでしたか。

とてもよかった（3 名）	よかった（7 名）	あまりよくなかった（0 名）	よくなかった（0 名）

4. １授業２時間の長さはどうでしたか。

丁度よい（10 名）	短い / 長い（何分が適当ですか。例___分）

5. コースを通してＡ１レベルの Can-do に達したと思うレベルを書いてください。

十分に達した（3 名）	ある程度達した（7 名）	あまり達しなかった（0 名）	全然達しなかった（0 名）

6. コースのどの活動が楽しかったですか。

「買い物や旅行についての会話練習」「日本を深く知ること」「日本文化を学ぶこと」「言語と文化のバランスが良かった」「ウェブサイトがいい」「文化や旅行について話し合ったこと」「ＣＤを聞いて何を意味しているか推測すること」「食べ物、注文、買い物」「日本文化全て」

7. コースについて改善すべき点はありますか。

「Can-do ごとに学ぶことは良かったが、自分で星マークをぬることは学習の助けになっているかよく分からない」「語彙帳がほしい」「教科書のレイアウトが分かりにくい。混乱する。英語の説明がもっとあったほうがいい」「ウェブサイトで教科書の英語訳が載せてあるといい」「教科書に文法説明があるといい」「特になし、すべてがよかった」「特になし、わかりやすい」